

戸山サンライズ

特集

農福連携

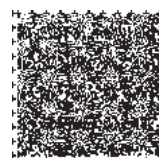
2017年

秋

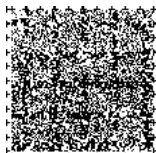


スポーツ 農村地域での障害者とスポーツ 現状と課題

グラビア 第32回 障害者による書道・写真全国コンテスト 結果発表



全国障害者総合福祉センター



←これは、SPコードです。
専用読み取り装置の使用により、誌面の内容の音声出力が可能です。

第32回障害者による書道・写真全国コンテスト

写真部門 金賞 「千畳敷カールの秋」

愛知県 牧原 和敏

(作品PR)

信州駒ヶ根に、こんな素敵などころがあるとは知りませんでした。
日常離れた風景ですね。感動しています。



このコンテストは、障害者の文化活動等の推進を図ることで技術の向上、自立への促進並びに積極的な社会参加を目的として、(公財)日本障害者リハビリテーション協会(全国障害者総合福祉センター)の主催により毎年開催されているものです。第32回を迎えた今回のコンテストでも、全国各地より204点(写真部門)にのぼる素晴らしい作品がよせられました。

目次

2017年秋号

■特集：農福連携

農林水産省における農福連携の取組について——糸賀 信之 1

農福連携で地域を元気に！——熊田 芳江 4

社会福祉法人くりのみ園の取り組み

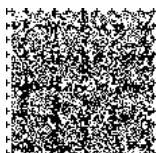
—里山・地域農業の担い手を目指して— 島津 隆雄 7

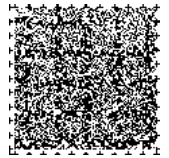
■スポーツ

農村地域での障害者とスポーツ 現状と課題——後藤 貴浩 10

■グラビア

「第32回 障害者による書道・写真全国コンテスト」結果発表—— 13





農林水産省における農福連携の取組について

農林水産省農村振興局都市農村交流課
課長補佐 糸賀 信之

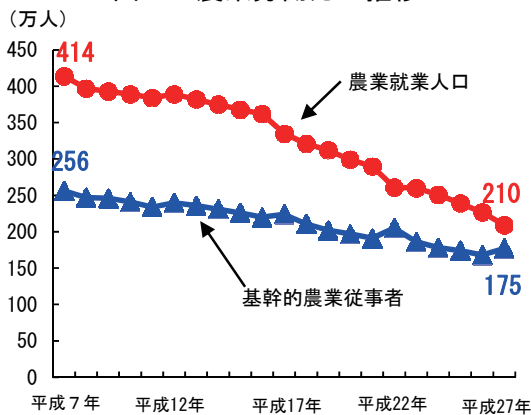
1. はじめに

今、農業・農村の現場では、農業就業人口の高齢化等により、農業労働力が著しく減少しています。平成7年には414万人だった農業就業人口は、平成27年には210万人と、わずか20年で約半数に減少しています（図1）が、今後もこの傾向は続くと考えられています。また、この就業人口の減少に呼応するように、耕地面積が減少しています。平成7年には504万ヘクタールだった耕地面積は、

平成27年には450万ヘクタールと、20年間で約11%も減少しています（図2）。そのため、農業労働力の確保と耕地の有効活用が農業・農村の振興に向けた課題となっています。

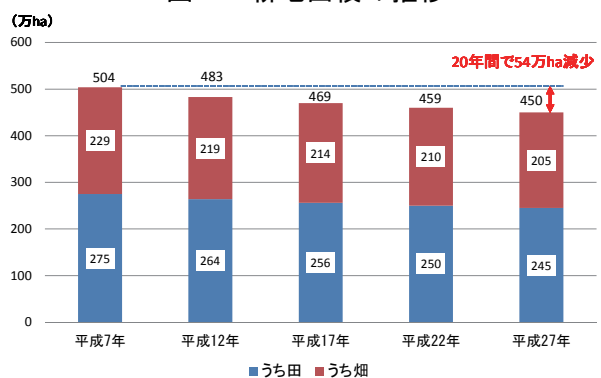
一方、障害者福祉の現場では、ほぼ全ての年齢層で、障害者の就業率が一般よりも低くなっています。平成18年の調査（図3）によれば、20代後半から50代後半までの世代の就業率は、「一般」では8割程度なのに対し、「身体」及び「知的」障害

図1 農業労働力の推移



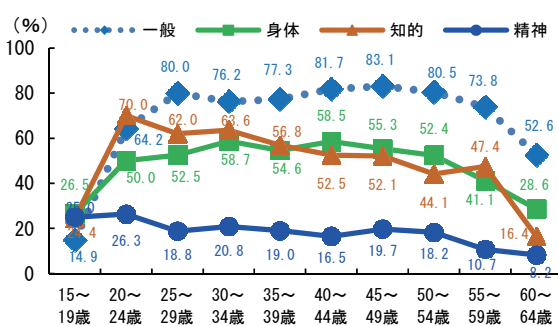
資料：農林水産省「農林業センサス」、「農業構造動態調査」

図2 耕地面積の推移



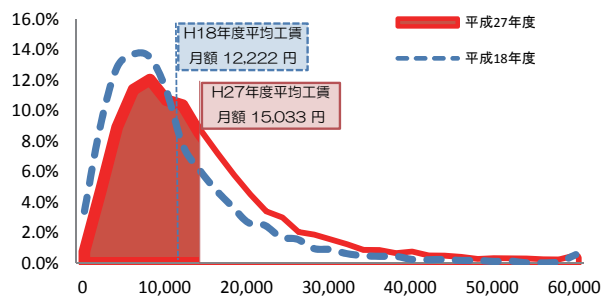
資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」

図3 障害者区別年齢別の従業率

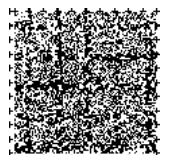


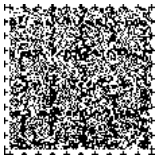
資料：厚生労働省「身体障害者、知的障害者及び精神障害者就業実態調査」（平成18年7月1日現在）、総務省「労働力調査年報」（平成18年）

図4 平均工賃分布割合（事業所数割合）



資料：厚生労働省「平成27年度工賃（賃金）の実態について（就労継続支援B型事業所の平均工賃）」





者の就業率は5割から6割程度、「精神」障害者の就業率は2割程度と低い状況です。また、平均工賃について

でも上昇傾向にあるものの、依然として低い状況です(図4)。そのため、就業機会の確保と工賃の向上が障害者福祉の課題となっています。

これらの課題の解決に向けて政府は、「日本再興戦略2016—第4次産業改革に向けて」(平成28年6月閣議決定)において、多様な働き手の参画に向けて「農業分野での障害者の就労支援(農福連携)等を推進する」こと、また、「ニッポン一億総活躍プラン」(平成28年6月閣議決定)において、障害者等の活躍を支援すべく「障害者の身体面・精神面にもプラスの効果のある農福連携の推進」をすることとしています。また、「未来投資戦略2017—Society 5.0の実現に向けた改革」(平成29年6月閣議決定)においては、「農福連携による障害者の就労支援を推進する」こととしています。農福連携によって、農業・農村と障害者福祉双方の課題を解決しながら、双方にとって利益(メリット)があるWin-Winの関係となるような取組を進めていくことが重要です。

2. 取組にあたっての期待と不安

農福連携が図られることにより、農業・農村(主として農業者)側、福祉側双方にとってメリットのある良い取組となることは事実ですが、実際に取組を始める際には、両者とも少なからず不安(課題)を抱えてい

ることがわかっていきます。例えば農業・農村側には、高齢化した農家を補助する労働力としての期待がある一

方で、障害者に作業をどのように教えてよいかわからない、雇用した後のケアについて誰に相談すればよいかわからないといった不安があります。

また、福祉側には、農作業を通じて自然とふれ合うことでリハビリテーション効果が期待できる、あるいは一般就労に向けた訓練の場として期待できる一方で、技術や経験がない中で農作物を栽培できるのか、安全に作業ができるのかといった不安があります。

そのため、まずは、稲刈りなどの農作業体験や特別支援学校での農業実習等を、障害者を支援する機関等とも相談しながら実施し、時間をかけて良好な関係をつくっていくことが大切です。そのような活動を通じて、お互いの不安が払拭され、メリットが実感できるようになることにより、次のステップとして、農業者と障害者施設との農作業の請負契約や、最終的には、農業者による障害者の雇用等に繋がっていくことが期待されます。

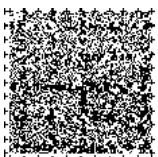
3. 農林水産省における農福連携の支援制度(平成29年度)

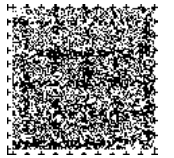
農林水産省では、未来投資戦略2017等の政府戦略に基づき、農福連携を促進するため、社会福祉法人等が障害者の就労・雇用等の目的で行う農園の整備や、農業経営体が障害者に農作業を委託できるようにするために、地域協議会が行う障害者の受け入れ環境の整備に要する経費等を支援しています(表1)。この支援を活用することにより、

表1 農山漁村振興交付金(農福連携対策)の概要

対策名	内容	補助率	実施主体
農山漁村振興交付金 ○都市農村共生・対流及び地域活性化対策のうち農福連携対策 ・福祉農園等整備・支援事業	障害者の雇用・就労等を目的とした福祉農園及び加工・販売施設の整備を支援するとともに、専門家による農業・加工技術、販売手法等の習得を支援	ハード 1/2 以内 ソフト 定額	社会福祉法人、特定非営利活動法人、社団法人、民間企業等
・農福連携支援事業	農業経営体が障害者に農作業を委託する取組について、障害者の受け入れ環境の整備(トイレ等の施設整備、サポーターの育成・派遣)を支援するほか、就農等を希望する障害者等を研修生として農業経営体が受け入れる場合の支援	ハード 1/2 以内 ソフト 定額	地域協議会(構成員に市町村が含まれるもの)

※このほか、農福連携に係る普及啓発や調査・研究の実施を支援しています。





福祉農園及び加工・販売施設の整備や農産物の生産・加工技術等の習得、農業経営体が障害者を受け入れる場合に必要トイレ等の施設の設置や、サポーターの育成・派遣等が可能となります。

4. 取組事例

静岡県浜松市にある株式会社ひなり浜松事業所（以下「ひなり」という。）は、農業に付帯する軽作業を複数の農家から請け負うことで、周年で障害者の働く場所を確保するモデルを確立しました。障害者3～4人に管理者1人の体制を基本に、農家8戸から農作業（収穫、定植、出荷、調整等）を請け負い、20人の障害者を雇用しています。農業技術については、管理者が障害者を指導しながら一緒に作業を行う中で、連携をしている農家から習得しています。作業を委託している農家からは、「ひなりの存在により労働力が確保され、経営規模の拡大につながった」と評価されており、労働力の確保による地域の農家の経営改善に貢献しています（図5）。

5. おわりに

農福連携に関する取組事例、支援制度については、農林水産省のウェブサイトに掲載のパンフレットを併せてご覧ください。

(<http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/attach/pdf/kourei-2.pdf>)

また、パンフレットの巻末にご紹介のとおり、農業分野における障害者就労を促進するため、行政、福祉、農業等の関係者で構成するネットワーク（協議会）が、地方農政局等の単位で設立されており、優良事例の紹介やセミナーの開催等が行われておりますので、お気軽にお問合せください。



図5 ひなりメンバーによる農作業の様子



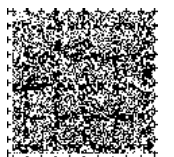
トマトの収穫



アスパラのほ場整備



チンゲンサイの収穫



農福連携で地域を元気に！

社会福祉法人こころん
施設長 熊田 芳江

1. 農福連携の広がり

全国でひろがりをみせる「農業」と「福祉」の連携「農福連携」は、地域の課題解決方法のひとつとして、連携することにより新しい事業や考え、地域コミュニティを生み出し、全国に「福」を広げることを目指す取り組みとして注目されています。本来の農業とはそういった地域の環境や人々と深いかかわりのなかで育まれてきたものでした。

農業は百姓と言われるように、百の仕事がありたくさんの仕事を生み出す可能性があります。その担い手も障がい者、高齢者、生活困窮者など様々な人に合わせて、仕事づくりができ、小さな事業から大規模農業まで様々な形態で働くことが可能です。

また、土に触れて物を作り出すという意味では、障がい者の体力づくりやこころの健康にもよく、病気や障がい改善されている事例がたくさん報告されています。

近年の農業人口の高齢化や人手不足による耕作放棄地の拡大は、深刻な課題となっていますが、福祉事業と組み合わせることによって、農家にとっても福祉事業所にとっても両方にメリットが期待されています。

障がい者施設で取り組んでいる就労支援B型事業の障がい者へ支払われる1か月の全国平均工賃は約1万5千円であり、障害年金約6万6千円と合わせても、大人が1か月の生活費を賄うには十分とは言えない現実があります。せめて年金+5万円は必要と思われれます。それでも最低の生活が維持できるレベルではないでしょうか。私たちの目指すノウハウというのは、地域課題を解決するために、

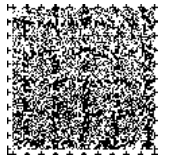
という期待もありますが、福祉事業所はあくまでも障がい者の経済的な自立や、健康づくり、人間らしい生き方を取り戻すためのリハビリテーションが本来の目的のはずで、農福連携は耕作放棄地を借りて再生させるなど、結果的に地域の課題の解決にもつながっていますが、福祉本来の目的を見失ってしまうと、様々なひずみが生まれて来るのではないかと感じております。



2. 農業への取り組み

こころんは2004年に精神障害者地域生活支援センターとして立ち上がりました。利用者の多くは、うつ病や摂食障害などのストレス性の病気や発達障害などが目立ち、「一日三食食べる、夜は寝る、朝起きる」という当たり前の生活習慣が出来ていない方が多く、食事を通して、大切な身近な人とのコミュニケーションも十分に取れていません。センターには「働きたい」という目的で相談に来られるのですが、コミュニケーションがうまくいかないなどの理由ですぐに仕事をやめてしまう方や、疲れやすく仕事をする体力も十分でないようです。

こころんでは一日の生活のリズムを整えることを中心に、食事は自分たちで作って食べることから始め、体づくりと働くことを兼ねて椎茸の原木栽培を始めました。施設の前は田んぼ、後ろは山



という恵まれた環境の中で、毎年300~500本程度の原木を購入し、植菌をして裏山に並べて置くだけで、半年後にはおいしい椎茸が収穫できます。しかし東日本大震災以後は、放射能の影響で、このおいしい椎茸は作れなくなりました。

その他には、使われていない畑を紹介して頂き、味噌の原料になる「タチナガハ」という大豆を栽培し、その豆で味噌屋さんに味噌を作ってもらい、イベントや、ホテル、レストランなどに販売し、利用者の仕事としました。これがころんの農福連携の始まりです。



3. 安心、安全にこだわって

日本では死亡率のトップに癌があり、現代は2人に1人が罹ると言われています。福島では放射能の問題も大きな不安材料です。また、食生活の変化に伴って鬱や発達障害の増加も指摘され始めています。健康に生きるため、体に良いものを食べたいと思いますが、日本のオーガニック農産物はわずか0.18%しか生産されていないので、簡単には手に入りにくいものです。

周りには遊休農地はたくさんありますので、自分たちで生産しよう、という単純な動機で始めた農業ですが、農業技術も、設備も、お金もない中での農業はとても大変でした。

現在約2haの農地はすべて有機栽培で行っていますが、試行錯誤の繰り返しで、形や収量がいまだ不安定なところがあり、安定的な収入に結び付いていないのが現実です。しかし、農薬や化学肥料を使用しない野菜は、味や香りが抜群に良く、鮮度が長持ちして野菜本来のおいしさを味わうことが出来ます。

4. 地域の拠点「ころんや」

平成18年にオープンした「直売所&カフェ・ころんや」は、地域で生産される農産物や加工品、調味料などをセレクトした直売所とカフェです。

地元の農家が直接朝採り野菜をお店に持ち込む委託販売方式です。こころやで働く利用者は、販売、商品の管理、陳列、賞味期限の管理、掃除、カフェの調理やウェイトレス、時にはお客様の荷物を車まで運んであげるなど、たくさんの仕事があり、利用者はこれらすべての仕事に従事しています。



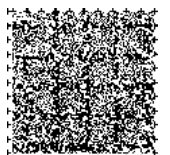
5. 移動販売

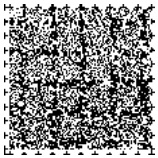
泉崎村には2つの団地があります。当初は買い物に来ることが困難なお年寄りをお迎えに行っていましたが、たくさんの希望に叶えられなくなり、こちらから販売に出かける移動販売に切り替えました。現在は仮設住宅や団地、役所、施設、病院、一般家庭などほぼ毎日スタッフと利用者2名で販売に出かけます。同じ曜日に同じ時間、同じ場所に行くように設定されており、仮設住宅や団地ではお年寄りが、時間より早くから来て待っています。



6. 様々な仕事を生み出す六次産業

ころんの農福連携は一次産業である農業、お菓子やお惣菜の加工、販売と六次産業的な機能があり、た





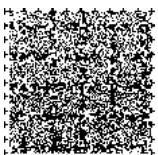
くさんの小さな仕事がありますので、利用者は自分の希望や得意な部分が発揮できるよう、様々な仕事が体験できる仕組みになっています。

農場は地域で放置されている耕作放棄地を借りて開拓し、養鶏場の鶏糞を堆肥化したものを畑に投入し、地力を回復させて美しい畑に再生します。こうした農地は約2ha、ビニールハウスも手作りし冬場の仕事場も確保しました。平成29年度からは自然栽培方式で米作りにも挑戦しています。その他、施設外就労として、野菜農場の管理、フキ定植、収穫の終わったトマトハウスの片づけや、果樹園の剪定後の畑の片づけ作業などの仕事が単発的に入ります。農場で働く利用者さんは体力もつき、たくさんの仕事を体験しているので、非常に動きが良く「良い仕事をしてくれるので助かるよ」と農家さんから感謝されています。



7. 地域の中で当り前に働く

企業と取引をするうえで気を付けたいことは、企業や社会のルールを尊重することが大切、最近では理解のある企業が増えておりますが、福祉の立場だけを優先すると、一般の企業からは付き合いてもらえないことがあります。納期を守ることや「無理です」「できない」などすぐに結論を出さないこと、一般企業であっても施設で起こるような課題や悩みを抱え、それらを乗り越えて現在に至っているのですから、そういうことは通用しません。あまり職員だけが頑張っていて、疲弊するようでは困りますが、常に少しだけ頑張ることを心掛けてみてはどうでしょう。そういうことを地道にやっ



ると、企業や地域の方々も対等な関係、ビジネスパートナーとして付き合ってください。

このころんの下請け作業の中に、高級ランドセルのパーツ加工があります。利用者さんは丁寧な仕事をしますので、仕上がりがきれいです。人数が多い分、ある程度の量産もできます。幸い工場が近い所にあり、たくさん仕事を回して下さるようになりました。

今、全国に約14,000箇所の就労支援事業所がありますが、工賃の格差は一般企業との連携ができるかそうでないかによって、大きな開きになっているように思います。企業と良い関係ができるようになりますと、事業所側も経営感覚が身につく、利用者の一般就労にも繋がって行きます。

8. 事業の成果について

このころんの取り組みは、地域の農家や取引業者、消費者など様々なつながりが増え、少しずつ地域に根付き、自然な形で地域に参加できるようになって来ました。連携してできた商品は地域の特産品として注目され、泉崎村ふるさと納税の返礼品として「このころん」の農産物や特産品が送付されることもあります。

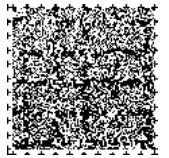
地域の農家や加工品の生産者、その他の取引業者、消費者などたくさんのつながりが増え、何よりも地域の人々が障がい者に対する理解が進んでいることを実感しています。

9. 「ディスカバー^{むら}農村漁村の宝」

このころんは平成29年度の農林水産省が推奨する「ディスカバー^{むら}農村漁村の宝」に選定されました。農山漁村活性化の優良事例として全国から844の応募があり、31団体が選定され、11月22日、総理官邸において、表彰式と交流会が行われました。その席でこのころんは、「アクティブ賞」を受賞しました。農福連携に取り組んでいる福祉事業所が、このころんを含めて3団体ありましたが、いずれも大変素敵な取り組みであり、これからの農業、地域づくりには福祉的な視点が、欠かせないものとなり、大いに期待されてくるものと思われま

社会福祉法人くりのみ園の取り組み — 里山・地域農業の担い手を目指して —

社会福祉法人くりのみ園
理事長 島津 隆雄



はじめに

社会福祉法人くりのみ園は、信州北信濃の観光地で年間100万人の観光客が訪れる小布施町に、1997年、福祉施設ではなく大きな農家、里山の桃源郷を目指して「くりのみ園」を開設し、自然循環農法による農業に取り組んできました。

その当時、各地にある入所施設の多くでは、当然のごとく施設の周りの農地を使い、米・野菜を育て、シイタケ、鶏や豚を飼育していました。障がい者とともに暮らし生活していくためには、まず食料を確保しなければならず、自給体制を整えようとして取り組まれたと思います。そこには、福祉の先人たちが、施設福祉に込めた思い、福祉の原点があったように思います。

そんな状況の中、施設の中でどうしてもままごとのように取り組まれている農業を、この皆様の可能性とともに地域の農業として存在させられないものか、そんなある種無謀な思いから、くりのみ園という福祉農園づくりをスタートさせました。

本来、施設福祉の源流は、「生産性」と「教育性」による「自立」を目指した挑戦であり、実践ではなかったのか。里山に存在したかつての大きな農家のように、障害者も健常者もそして自然も、ともに穏やかに暮らせる「共生」の場を作れたら素晴らしいことではないかと考えました。おそらく、

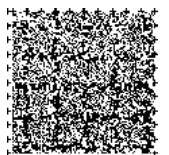
昔も今も、障害者福祉解決の切り札なのではないでしょうか。まさに働くことの原点は命を育む食料を生産する農業にあると思います。障害を持つ仲間たちは、そんなことを教えてくれているように思います。こんな、理想と現実のはざまで「くりのみ園」の取り組みを進めてきました。

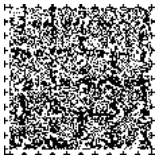


園舎

○ 農地の確保と技術

当時、福祉が農業に取り組むことはほとんど想定されてなかったため、里山の農業振興地域に社会福祉施設を建設するためのハードルは高かったです。しかし、地域農業を担っていく活動にするためには、どうしても関係機関のご理解を得る必要があります。建設の1年半前から、事前に就農し、本気で農業をする思いを理解していただく必要がありました。農村地域は、簡単によそ者を受け入れてはくれないのが現





実でした。こうして、小さな施設の建設と、必要最小限度の農地を確保して活動をスタートさせました。

次の大きな課題は、農業技術の習得でした。平飼い養鶏、稲作、野菜作りとの戦いが始まったわけです。畜産経験者の協力を得ながらの取り組みでしたが、ヒナの育雛は、試行錯誤の困難を極め、それでも、やり続けるしかない状況でした。40年間農薬と化学肥料を多投してきたアスパラ畑を借り、果菜類を栽培しましたが、販売できるような野菜になりませんでした。ジャガイモも同じでした。簡単に優良農地を貸してくれるものではないことを後で知りました。

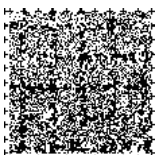
そんな、苦闘の中で救いの手を差し伸べてくれたのは、自然農業に取り組む地域の篤農家の方でした。くりのみ園としても、持続可能な農業、自然栽培になんとかあこがれていたのが、地域の縁と絆に本当に心強い思いをしました。

また、高度経済成長の時代の中で広がる食物汚染が、多くの障がい者を生み出していく現実も見据えながら、障害者問題の根本的解決のためにも、農薬、化学肥料を使用しない自然循環型の「有畜複合経営」をくりのみ園の農業の柱にすることが徐々に固まってきました。

○ 施設が農家になるために

社会福祉施設が、経営として農業を成り立たせていくためには、そこでの農産物が他の農家に比しても引けの取らないものでないと販路を広げることにはできない現実もありました。どうしても、社会的な信用を獲得する必要があると考えました。

2009年、就労継続支援A型事業の開始とともに、「認定農業者」の申請



をすることを思い立ちました。しかし、「福祉」が「農業」に取り組む社会的理解は少なく、申請は、却下されてきました。翌年再度申請をし、どうかご理解をしていただきました。

また、「6次産業化」についても、くりのみ園で目指している農業の考え方にあっていると考え、2013年、6次産業化認定者にしていただきました。

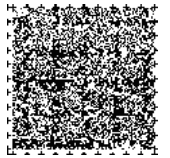
○ 平飼いの鶏が生むブランド卵

生き物から大地へ、作物からまた生き物へ、そうやって、いのちがめぐり、新たないのちへと繋がっていく、昔は当たり前であった自然循環農業。「平飼い」「放牧」の自然卵養鶏に活路を見出そうと、3500羽のニワトリたちの飼育を中心とした農園経営に挑戦しております。「うちの子、アトピーがあるけれど、くりのみの卵なら食べられるのよ」という消費者の声を聴くときに、この卵が持つパワー、自然の力のすごさに思いをいたし、これを真のブランドにすべく、飼料米による自家配合飼料づくりを進めています。

現在、年間70 tほどの飼料米を地域農家の協力を得て、確保しています。日本の食料自給率向上にも貢献できていることになるわけです。



平飼い、放牧養鶏



○ 除草剤を使わない米作り

平飼養鶏では、鶏糞は微生物発酵による魔法の堆肥に、鶏舎内で変わります。これを使うことにより、有機無農薬の米作りに挑戦しています。田草との戦いです。

施設の周りの田園地帯、毎年荒れた田が増えていくのが現実です。地域の耕作放棄地を解消しつつ、「無農薬玄米」のくりのみブランド米の生産販売を軌道に乗せようと奮闘しています。



無農薬米

○ 信州伝統野菜の栽培と普及

この魔法の鶏糞堆肥を畑に入れて、信州伝統野菜（小布施丸茄子、八町キュウリ、沼目白瓜）を栽培しています。無農薬、有機栽培の野菜のおいしさは、食べていただくとわかります。

これらの野菜には、自然のパワーがあります。ことに、小布施丸茄子は、甘さがあり、絶品との評価をいただきます。

○ 6次産業化と農産加工

利用者の皆さんの職域を広げることを考えながら、「6次産業化」として農産加工・販売に取り組んでいます。

（スイーツ）カステラは、卵の質で決まる。老舗お菓子屋さんが教えてくれました。マフィン、シフォンケーキも当園の野菜を使い、工夫をしています。

（卵油）日本古来の健康食品です。

平飼有精卵を使用します。

（米麴味噌）耕作放棄地を再生し、大豆を栽培します。米、大豆を使い、地域の老舗味噌醸造所で委託加工していただき、販売しています。

（漬物）信州伝統野菜の粕漬です。

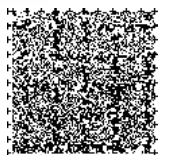
これらを、直営店とネットで販売促進をしています。

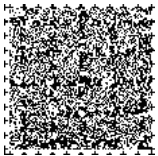


6次産業くりのみブランド化商品

○ おわりに

この取り組みは、古くて新しい福祉の形づくり、障害を持つ人たちの可能性への試みであると思っています。「ほんものの食」がブランドになる時代、疲弊してしまった地域農業の担い手として、障害を持つ人達が貢献できれば、それこそが里山を新たな「地域共生社会」として再生していける可能性すら含んでいるのではないのでしょうか。





農村地域での障害者とスポーツ 現状と課題

国土館大学
後藤 貴浩

1. はじめに

障害者のスポーツに限らず、あらゆる人たちのスポーツ実践の普及・振興は、制度的状況の整備(=制度化)が基盤となる。また、「福祉の充実」という場合も、多くは公的福祉サービスの制度化を意味する。障害者スポーツが「福祉」の領域であれ、「スポーツ」(教育・文化)の領域であれ、制度化は普及の一つの目安となる。

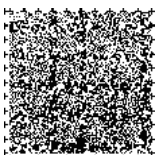
この制度化には一定の社会資源が必要なことは言うまでもない。障害者のスポーツでいうならば、施設、指導者、支援組織、移動手段、用具(装具)などがそれに当たる。本稿では、農村地域¹⁾を対象に障害者のスポーツの現状と課題について論じるわけだが、一般的な見方として、農村地域はそのような社会資源が都市部と比較して乏しく、実践的課題が多いことが想定される。そこで、まず熊本県の農村地域を事例に、制度化という視点から、その現状と課題について確認する。そして、課題を克服していくために、制度化とは異なる「もう一つの方法」として生活化という視点について検討する。その上で、農村地域における障害者スポーツの可能性について言及してみたいと思う。

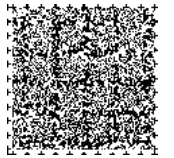
なお、熊本県の現状と課題の把握に関しては、「熊本県障害者スポーツ・文化協会」(中尾直道氏)、「熊本県障がい者スポーツ指導者協議会」(辻啓司会長)、ならびに熊本県山都町²⁾に居住し国内外の障害者スポーツ大会で活躍する藤島大輔選手への聞き取り調査を行った。

2. 熊本県における農村地域の障害者 スポーツの現状と課題

「熊本県障害者スポーツ・文化協会」では、県内で幅広く障害者スポーツを普及させるために各種教室の開催や用具整備に取り組んでいる。しかし、活動の拠点が熊本市にあることから、施設へのアクセス可能な障害者のみが対象となっている。職員の中尾氏によると、農村地域でもできる限り教室を開催し、障害者がスポーツと触れ合う機会を確保できるよう努めているが、「非常に遅れている」と感じている。氏は、指導者、施設、用具の不足などの根本的な問題のほかに以下の課題を指摘する。農村地域に住む障害者の場合、都市部と比較して社会参加の機会が限られているため、教室開催などの情報入手の機会も制限される。地域の福祉施設や団体を通して参加を呼び掛けることが多いが、対応する施設や団体間(職員間)でスポーツ実践に対する意識の差がある。また、県の障害者スポーツ大会への選手派遣に関して、「福祉」行政の中で対応されることが多く、スポーツの普及という視点ではなく、「出場経験のある人」「スポーツのできる人」への参加要請が安易に行われるため選手の高齢化・固定化が著しい。さらに、パラリンピックなどにおいて競技の高度化が進めば進むほど、それに対応した用具を農村地域で準備することは困難であると語っていた。

「熊本県障がい者スポーツ指導者協議会」では、熊本県を6つの地域支部に分け、普及活動を行ってきた。会長の辻氏は「身近な地域でやれるのが一番。最初の教室の講師は協議会から派遣するが、





その後は地域の人に教室を運営してもらおう形を続けている」と語っている。その上で、農村地域での障害者スポーツを普及させるためには、地域にある福祉施設の協力が欠かせないと指摘する。農村地域でも比較的スポーツ実践者の多い地域には、支援者たちが「(活動のための)会議をしたり、ちょっと集まる場所(福祉施設)」があるという。そのような拠点となる場所があれば、多少の障壁があってもそこから活動のためのさまざまな工夫が生まれるのである。また、農村地域では、都市部と比較して、学校卒業後に改めてスポーツの楽しさを知るという機会は限られている。そのため、幼少期から青年期にかけて学校(特別支援学校など)で、日常的にスポーツを経験し、その楽しさを知ることが重要であると指摘する。

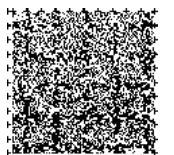
熊本県山都町に住む藤島選手は、そのような学校でのスポーツ経験が競技者としての活動に結び付いた一人である。彼は、農村地域に暮らしながら陸上競技とスノーボードで国際的に活躍するアスリートである。1985年に山都町に生まれた藤島選手は、現在、実家近くで妻、子ども(4人)、義母と暮らしている。地元の小中高校と進み旧清和村役場(現山都町役場)に入庁した。1歳のときに事故で片足を切断し、幼い時から義足での生活を送っている。日常生活で「もどかしさ」を感じるがあったというものの、小学校でサッカー、中学校で卓球、高校ではバスケットボールと複数の種目を経験してきた。

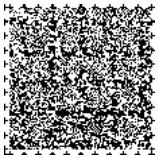
高校1年の時に、役場職員から誘われ「ただ走ればいい」という思いで出場した県の障害者スポーツ大会(陸上競技)で好成績を残し、全国大会へ出場することとなった。その後、国内外の大会(100m、走り幅跳び)で活躍し、日本記録を保持するトップアスリートとなった。スノーボードは、高校3年生のときに兄の影響で始め、隣町(宮崎県五ヶ瀬町)のスキー場で練習している。2015年から始まった「全国障がい者スノーボード選手権大会」に参加(入賞)し、昨年からは海外(カナダやオランダなど)の大会にも参戦している。

藤島選手には、活動のための特定のスポンサーや資金的な援助があるわけでない。スノーボードの場合、歩行用義足を使用するが、陸上競技ではスポーツ用義足が必要なため、大学の研究者の協力を得ている。このスポーツ用義足を使用できる施設が「田舎」(山都町)にはないため、車で90分ほどの施設まで行かなければならない。農村地域で競技活動が続けていくためには、このような施設の問題とともに、移動や用具(装具)の入手にかかる費用の問題も大きい。また、藤島選手はそのような環境的な課題とともに、スポーツ活動に対する意識の問題も指摘する。「農村の人たちの意識として、『今の生活が続けば』という意識が強いので、障害者がわざわざ『遠くに出て』という意識や行動が起きない」と述べていた。町内において、国内外での彼の活躍はそれほど認知されておらず、「ずっと一人で練習やってきたし、一緒に練習する仲間はいない」という状況のなかで今も活動を続けている。

3. 障害者スポーツへの生活化の視点

さて、筆者はこれまで農村地域に住む人びとの生活構造とスポーツ実践の関係について研究を行ってきた。健常者を対象にした調査(後藤、2008)では、都市部と比較してスポーツ実践の量的側面には差異がないものの、農村地域のほうが集団や地域との関係性の中でスポーツを行う傾向にあった。その背景には「長く住み続けている」という土着性の強さがあることが分かった。また、障害者を対象にした研究(後藤、2010)では、事例地(葦北郡芦北町)で実践されている障害者のスポーツは、ほとんどが福祉施設入所者によるリハビリを中心とした施設内運動および高齢障害者によるグランドゴルフやゲートボールであった。そして、スポーツを実践する障害者の生活構造の特徴として、障害者の中でも経済的な位置づけが比較的高いこと、車の免許を保有するなど流動生が高いこと、地域





社会への公共性や健康への同調性が強いことが明らかにされた。さらに、スポーツ実践を支える社会関係の存在が確認されたが、ここで注目すべき点は、その社会関係がスポーツ活動に限定された直接的な関係ではなく、障害者が日々の暮らしのなかで形成してきた日常的な関係性³⁾であったことである。

どのように社会的に不利な状況(過疎農山村生活者や障害者など)であってもスポーツを実践する人たちが存在する。そのような人たちは、決して生活から独立した形でスポーツを行っているわけではない。筆者が、人びとのスポーツ実践を生活から捉え返す理由はそこにある。スポーツに関わり繰り広げられるさまざまな「生活実践」に学びたいと考えている。

どのように社会的に不利な状況(過疎農山村生活者や障害者など)であってもスポーツを実践する人たちが存在する。そのような人たちは、決して生活から独立した形でスポーツを行っているわけではない。筆者が、人びとのスポーツ実践を生活から捉え返す理由はそこにある。スポーツに関わり繰り広げられるさまざまな「生活実践」に学びたいと考えている。

4. 生活化する障害者スポーツの可能性

今回の聞き取り調査結果から、農村地域における障害者スポーツの課題を以下の2点に整理することができる。一つは制度化に必要なさまざまな社会資源(施設、移動手段、情報、人的サポート)が不足していること。もう一つは、障害者がスポーツをするということに対する意識の問題である。これらの課題に対して、政策的に対応したり、啓蒙的な活動を推進したりすることは必要なことであろう。しかし、そのように障害者とスポーツの関係をダイレクトに捉え、「スポーツ実践に関わる」社会資源の整備や意識の変革を目指す方法(スポーツの制度化)とは異なる方法もある。それが前述した「生活」への視点(スポーツの制度化に対してスポーツの生活化と呼びたい)である。

スポーツの生活化という視点から聞き取り調査を振り返ると、いくつかの興味深いコメント⁴⁾を確認することができる。例えば、中尾氏は、農村地域に多い「廃校」に着目してその活用を構想している。これを辻氏が指摘していた支援者(スポーツに限らない)が「ちょっと」集まる場所にしていくことも可能であろう。また辻氏は、関西地区で主に開催さ

れる電動車椅子サッカー大会に参加する際に、用具類を地元のスイカの輸送会社に依頼している。チームのメンバーが生活する農村地域は全国でも有数のスイカの産地で、関西地方に毎日のようにスイカを運搬している。それを活用したのである。さらに熊本県で電動車椅子サッカー大会(農村地域が会場)を開催した際に、選手の移動のために九州内の福祉施設へ福祉車両の貸出を依頼したことがあった。その経験をもとに、現在、休日に「眠っている」福祉車両を、障害者がスポーツをする際に活用できないかを検討している。

これらは、まさに身近な生活資源を活用するスポーツの生活化の一端といえるであろう。農村地域にも多くの生活資源が存在する。障害者のスポーツ実践に必要な社会資源を整備していくと同時に、私たちの生活のなかにある資源にも注目していく必要もあるように思われる。

文献

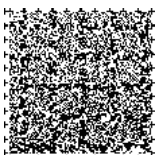
- 後藤貴浩(2008) 農山村の生活構造と総合型地域スポーツクラブ：生活のあり様とスポーツ実践の関係性に着目して. 体育学研究53(2)：375-389.
後藤貴浩(2010) 生活者としての障害者とスポーツ. スポーツ社会学研究18(2)：67-78.

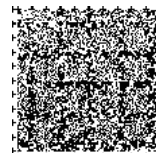
¹⁾ 混住化地域や中山間地などの言葉があるように、農村と都市や郊外地域との境界は曖昧である。しかし、現実に、地方に行けば田園風景があり、そこで暮らす人びとの間には、旧来からの社会関係や生活意識が存在する。そこで本稿では、農村を厳密に定義するのではなく、農家世帯を中心とする集落があり、伝統的な社会関係(祭りなどの行事や地域組織)が残存する地域と捉えておきたい。

²⁾ 山都町は、人口15,164人、高齢化率45.2%で、総面積の81.9%を農地・山林が占める(2015年)。第一次産業の就業人口は38.9%(2010年)となっており、人口減少・高齢化の著しい典型的な農村地域といえる。

³⁾ 農村地域に引き継がれてきた特有の「生活関係」ともいえる。

⁴⁾ 本来、農村地域の障害者の生活局面まで深く立ち入って記述する必要があるが、今回は調査期間や紙幅との関係もあり、それは適わなかった。ご容赦願いたい。





第32回 障害者による書道・写真 全国コンテスト 結果発表

「障害者による書道・写真全国コンテスト」は、障害者の完全参加と平等をスローガンとした1981年の国際障害者年を記念して、1984年に東京（新宿区戸山）に設置された全国障害者総合福祉センター（戸山サンライズ）が主催するもので、障害のある方々の文化・芸術活動の促進と技術の向上、またそれらの活動を通じた積極的な自己実現と社会参加の促進を目的に1986年から行っております。

今回、第32回大会には、全国から書道部門801点、写真部門204点（うち、携帯フォトの部17点）、合計1,005点という多数のご応募をいただきました。作品を出展していただいた皆様、ご協力くださいました関係各位にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

審査総評にもありますとおり、作品のレベルも年々向上し、甲乙付けがたく、審査は非常に難航いたしました。そのような中から、審査員の先生方の目に留まる素晴らしい作品を制作されました入賞者の皆様のお力には心より敬意を表します。ここに入賞された方々をご紹介します、入賞作品と審査員の寸評を掲載いたします。

審査総評

（書道部門）

今年のコンテストも801点という多数の参加者を数えました。これも手軽にリハビリとして取り組めることが大きな要因と思われます。文字の概念は小さな頃より耳からの情報を視覚情報と合致させることにより記憶、理解に結びついています。その記憶を毛筆などの道具によって、再生表現させる行為は頭脳の活性化と集中力の強化に結びついています。

「書く」という行為は人間の持つ原初的表現と言えるかも知れません。毛筆は普通の大きさでも二千本程度の毛により成っていますので、力の入れ具合により太くも細くも表現できます。その為に変微妙な力の入れ方を要求されます。筆を持つという行為一つを取っても一つではありません。このコンテスト応募の中には口や足などにより書かれた作品も多数あります。

このような困難な作業を続けるのは並大抵の努力ではありません。自分の可能性を信じ、自分の意思を伝えたいとの想いの高さを感じさせる作品群です。

毎年のことながら約6%強の入賞率で大変な厳選でした。入賞作品はそのような長い訓練やイ

メージの高さを思わせるものを選びました。

渡部 會山

（創玄書道会審査会員、毎日書道展審査会員）

（写真部門）

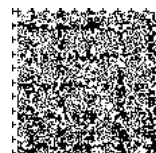
近年、映像技術は電子化によってすさまじい変化をとげました。

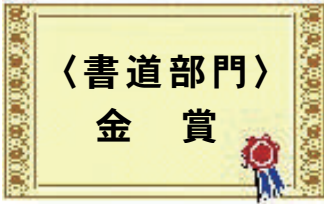
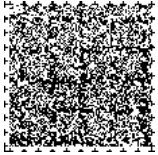
露出、フォーカス、連射などの機能によって運動機能に幾分のハンディをお持ちの方の自由を大きく広げ、的確な画面構成、理想的なシャッターチャンスで多様な物が捉えられ、パソコンによる画像処理と相まって素敵な写真が多く作られてきました。

今後ともより一層の技術の習得と、世の中の物事への好奇心を磨かれて前進されることを願うものです。

高岩 震

（フリーカメラマン、
日本映画撮影監督協会員）





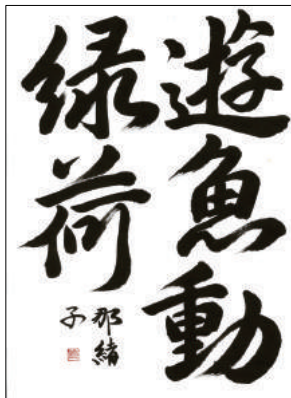
「心」
青森県 倉本 祐志
墨量豊かに打ち込んだ力強い線に深い感動を呼び起こされます。何物にも動じないしっかりとした「心」が十分発揮されている作品です。



「森」
宮城県 内海 綾
冬枯れの森を想像させる表現です。左手で書かれた右肩下がりの横画と構成が、作品に動きを与えて野分に揺れる森のイメージが出ています。



「黒」
山梨県 白石 浩二
文字の意味と実体験による印象がよく合致した作品です。下部は火が燃える形ですが原型のように猛烈に燃えあがる火となっています。



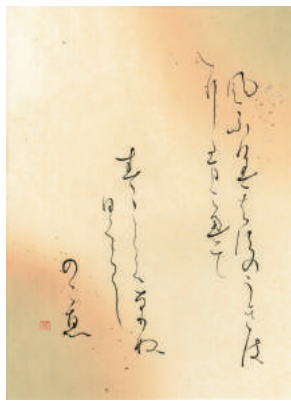
「遊魚動緑荷」
静岡県 杉本 才才子
豊かで温かな線が大変魅力的です。この線を生み出す訓練時間の長さと思われれます。余分な力の抜けた余裕ある運筆が大変高度な作品となりました。



「投手」
奈良県 西本 伊作
伸びやかに抜き去った明るく澄んだ線は力強い縦線と相俟って作品を大きく力強く見せています。体全体を上手に活かしています。



「寿」
鹿児島県 日高 律子
どっしりと大地に根を張った大樹のような力強い作品になっています。一本一本の線に生命力が溢れています。自信を持って運筆した賜物です。



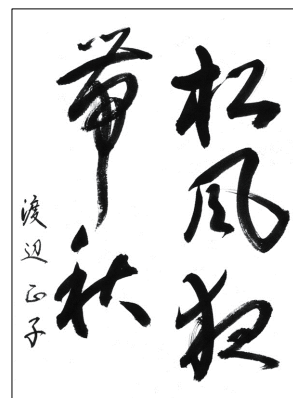
「かな部 金葉和歌集」
千葉市 阿部 ちい
仮名作品は繊細な筆の動きを要求されますが、よく穂先を立て直線の澄んだ線となっています。流れも自然で雅味を出しています。



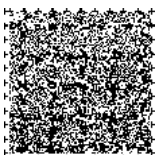
「走」
静岡市 山田 宗輔
写真の一つのフレームのように全力疾走する姿勢を思わせる感動的な作品です。鋭く抜き去った上部の横画がイメージを高めています。

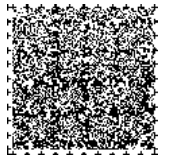


「独坐敬亭山」
広島市 伊藤 仁
細字は緊張感の維持に大変苦労するところですが、最後までその緊張感をよく保って書いていて見事な作品となりました。



「松風夜帯秋」
福岡市 渡辺 正子
行草体は意先筆後の呼吸が大切ですが、上手に筆の柔らかさを引き出しています。特に「帯」は余分な力の抜けた見事な筆法が作品を引き締めています。

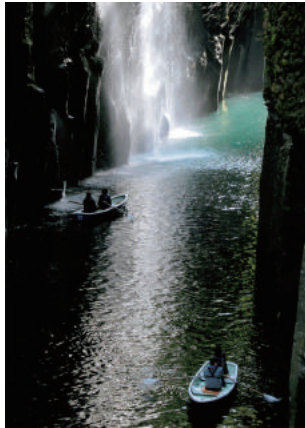




「寒中水行」

福島県 村松 市夫

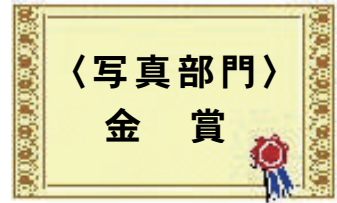
瀧畔をかこむ黒っぽい岩肌と、白い滝、白い衣装の行者たちのコントラストが鋭かな主張を形づかって、素敵です。



「涼を求めて」

千葉県 増澤 幾子

題名は一寸不可解ですが、写された高千穂峡の景色は素晴らしい、神々しくさえあります。



「信州の小径」

神奈川県 小出 庄作

茅葺きの水車小屋、並んだ道祖神、緑の豊かな山、まさにあなたが愛する信州がそこにあります。その心がにじみ出ています。



「千畳敷カールの秋」

愛知県 牧原 和敏

信州駒ヶ根に、こんな素敵などころがあるとは知りませんでした。日常離れた風景ですね。感動しています。



「お待たせ！」

京都府 安田 隆

構図といい、シャッターチャンスといい、申し分のない立派な写真ですね。ツバメ達に対する愛情が溢れていて、感動しました。



「わたげ」

徳島県 O. N.

たんぽぽの花の逆光の写真は数多くあるのですが、こんなにズバリと太陽を直後に入れたものは初めて見ました。大成功！素敵です。



「山鹿灯籠踊り」

熊本県 淀 敬

永い伝統の山鹿灯籠踊りを、美しい踊り手を選んで、いいアングルとタイミングで写されて、感動しました。スローシャッターで止めるところを止めて、よく写されました。



「二人三脚」

大分県 南 啓子

スローシャッターでバックを流して動感を出しながら、選手たちの表情をよく捉えて素晴らしい出来です。



「豊作の柿と藁葺」

広島市 堀越 義夫

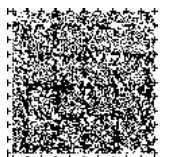
雲を頂いた大山をバックに一杯に実った柿と茅葺きの小屋、日本の原風景を見る思いです。

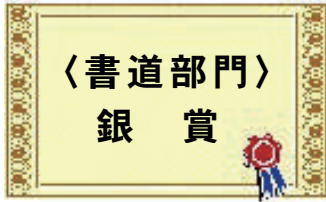
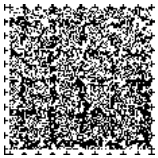


「たくさんのコイ（植物園にて）」

広島市 福島 美津子

エサに群がる鯉の群れ、迫力満点です。ピツリと眼玉にピントが合っていて力強い極みです。





「仲良く飛び立つ鳥」
岩手県 藤原 海翔
下部の大樹のような潤筆。上部の濁れのある点が飛翔する鳥のようで大変印象深い作品となりました。最下部の横画が活きています。



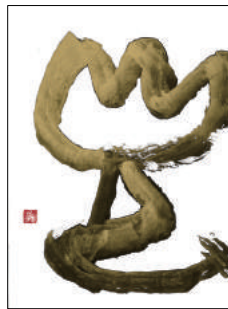
「善哉 (ゼンカナ)」
福島県 馬場田 幸一
潤濁の変化が自然で伸びやかな運筆で作品が大きく見えます。最後の文法が全体を引き締めて余情を出しています。



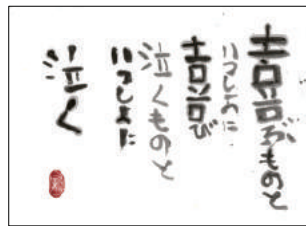
「流し素麺」
神奈川県 鈴木 紀子
すっきりと清澄感溢れた書線が見事です。迷いの無い自然体の送筆に心の余裕が見られます。落款も上手に入れています。



「土」
岐阜県 関谷 麻里
ガッチリとした大地。そこから二葉が出ているかのような作品。「土」は生命を維持し、継続させる母であると気付かせてくれます。



「古代文字 光」
滋賀県 連山 昂太
光の古代文字は神への祈りの姿であるが、この作品は金泥を含ませゆったりとした運筆が、一層原初の字義に近づけて効果的に仕上がりました。



「いっしょに喜び いっしょに泣く」
兵庫県 榎本 新
青墨での作品でニジミが美しく温雅な作品となりました。文章の意図が十分伝わる構成と潤濁の変化に心の動きがよく出ています。



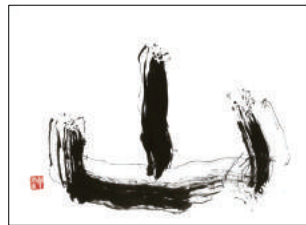
「ぼ」
島根県 山田 真由美
「ぼ」に込められた楽しさが伝わってきます。晴れやかな春を想わせる書の線です。名前もゆっくりに慌てず書いて作品を纏めています。



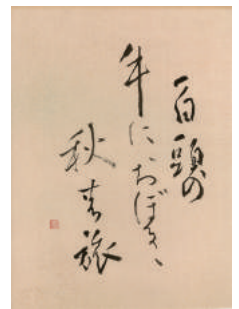
「花火」
長崎県 藤本 紗弥
重厚な線で書かれた文字は作品を大きく見せています。夜空に咲く大輪の花を手筆特有の柔らかさで上手に表現しています。



「得魚忘筌」
宮崎県 大塚 奈瑠美
迷い無い送筆が明るく澄んだ線を生み出しています。落ち着いた執筆姿勢は作品に清風を呼び起こしています。落款見事な配慮です。



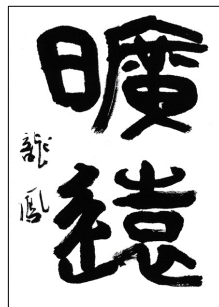
「山」
沖縄県 池原 正道
アダン筆は未見ですが篆筆に似た様子ですが、しっかり藏鋒を活かした雄大な山が書けました。気韻生動の意義を思い起こさせます。



「牛」
仙台市 石黒 裕子
筆の上部を持って書かれた線はしっかりと紙に食い込んで、適度な振幅の揺れが明るさと広がりを与えて見事な作品となりました。



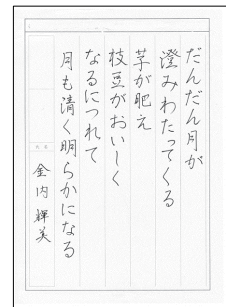
「池」
仙台市 伊藤 怜央
大胆な動きで紙面一杯に書かれたこの胆力に驚きを覚えます。重厚な潤筆と奔放な最終画の動きが作品に奥行きを与えて見事です。



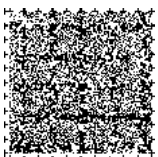
「曠遠 (コウエン)」
浜松市 芝田 耕太郎
篆書は筆法的に難度が高いがよく纏め上げています。特に上部は見事です。散氏盤を研究するとっと楽しめると思っています。

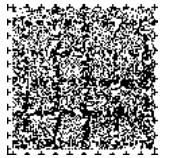


「魂」
広島市 鎌田 義則
気合の入った運筆で生き生きとした心の躍動感が紙面に充溢しています。落款が見事に書かれて作品を一層引き立てています。



「種山頭火「愚を守る」より」
福岡市 金内 輝美
落ち着いた執筆で線に伸びやかさがあがり漢字の行書部と平仮名がよく調和しています。小筆も楽しいですよ。頑張りましょう。





「着水」

青森県 相馬 修

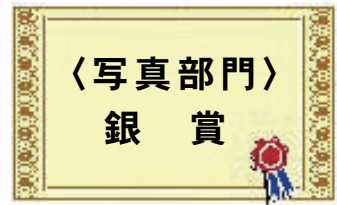
動きの激しい白鳥をよく捉えています。シャッター速度の関係で流れて見えますが、ちゃんとフォーカスは来ていますね。動きの表現が素敵です。



「鉄線の花」

福島県 赤坂 豊

初めて見る花ですが、綺麗で豊かな表情の花ですね。その花の心がよく伝わります。



「ハクチョウの群れ」

岐阜県 可児 芳春

白鳥の生活をよく御存知なのですね。かなたに夕焼け空もちらりと見えて、川面もおだやかで静かな夕暮に羽を休める白鳥がいとおしく見えます。愛情のこもった一枚です。



「塗顔の母娘」

静岡県 石川 博彬

恐らく色々な人がペイントをしたのでしょう。その中からこの二人を選んだあなたの眼が鋭いのですね。綺麗な母娘ですね。



「花桃の里」

愛知県 原 哲士

主役の桃をやや右寄りの前面に据えたダイナミックな構成が、見る人の目を引き付けます。そして雲海に漂う山々に色違いの花を配して全体を引き締めています。「絶品です」。



「天使の羽根」

鳥取県 佐々木 勝巳

恐らく、有名ではないけれど可愛い滝なのでしょう。しぶき美しさがよく出ています。天使の羽根を思わせるようですね。その



「水蓮」

徳島県 大和 未奈美

よく晴れた空を写して、水が深い青で、水蓮の白を浮き立たせてとても綺麗です。



「待っててくれた」

仙台市 佐藤 笑美子

松陰神社の重厚な造りと、その奥の桜の取り合わせが見る人の心を和ませる何かを持っています。それがよく出ていますね。



「覗いて見て」

仙台市 千葉 弘

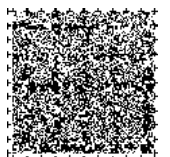
小さな壁の穴から覗き込むお嬢さんの姿がとつてもかわいく、その気持ちが画面から溢れています。

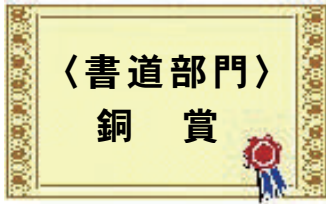
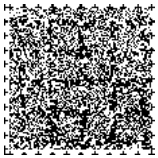


「息を合せて」

広島市 太田 一正

ファインダーが見えないながら、音を頼りに情景を想像してシャッターを切った。見事です。シャッターチャンスも構図も最高です。





「愛」

青森県 荒道 南月

優しい人柄なのでしょう。ゆったりとした送筆が温かで自然な流れを生んでいます。最終画に全体を引き締める力があります。



「好」

青森県 横内 翔太

序破急のリズムを感じさせる好作品です。旁の一気に力強く引き抜いた線にこの作品の意図が見られます。動きの大きさが目に入ります。



「般若心経」

岩手県 松田 志保

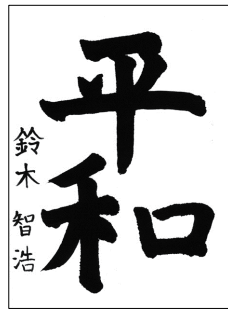
経を詠みながら書かれたかの如くすっきりと書かれた一行目が見事です。線に力強さと伸びやかさが書的に高いものとしています。



「山」

岩手県 昆野 織鶴

深山で雲が流れているような山になりました。視覚で捉えた情景を上手に書き上げています。濁筆も効果的に配されています。



「平和」

岩手県 鈴木 智浩

力強く引かれた線で纏め上げた作品です。特に一字目の縦画はどこまでも伸びて世界が平和との願いがよく出ています。



「8月は夢花火」

秋田県 長谷川 愛美

無理の無い運筆がすっきりとした作品に仕上げられています。夏の花火に対する愛情を花火の姿態に託して見事に書き上げています。



「なかよし」

千葉県 花見 明雄

心の籠もった作品です。線に温かさと強さが見えます。内に籠もらず外に向けて行動しようとする強い心に魅かれます。



「陶淵明四時」

富山県 吉崎 英雄

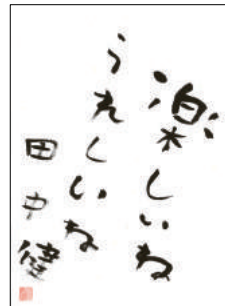
印四顆の作品ですがそれぞれ刀法の妙を活かした力は見事です。毛筆細字部のしっかりとした高度な書法は見ごたえが十分です。



「かな 春すぎて夏来たるしるたへの衣ほしたり天のかぐ山 百人一首詩」

岐阜県 秋田 喜久江

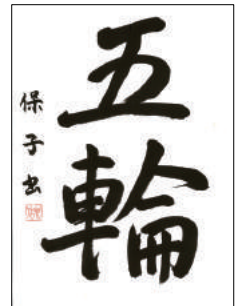
仮名特有の流れと布字が見事に配された作品です。潤濁の変化も好ましく四行目の息の長い線がこの作品に奥行きを与えています。



「楽しいね うれしいね」

岐阜県 田中 健

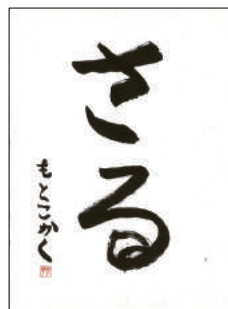
いかにも楽しげに書いている姿を窺わせる作品です。紙面で踊り出すように飛び跳ねるような筆致が作品に明るさと樂趣を出しています。



「五輪」

岐阜県 林 保子

よく筆が動いて行書の意先筆後のリズムが線に伸びやかさを生んで温和な作品となりました。「輪」は特に筆法に優れたものが發揮されています。



「さる(長いさるが好き)」

愛知県 堀部 素子

「る」の表情が何とも言えず好ましい。一気呵成に動いた終筆が破筆となったように表現して尾長猿のイメージを自然に出しています。



「お茶のお話し」

京都府 中村 良和

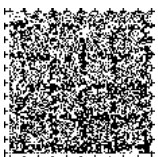
養生訓の言葉を外連の無い筆法で書いて墨跡のような心画ともいえる高尚な雰囲気を持った作品に仕上げられています。布字、落款も見事です。

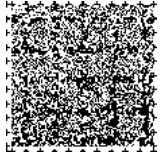


「海」

大阪府 山口 政明

岩礁に砕け散る大濤を想わせる作品です。しっかりと打ち込んだ筆致が怒涛渦巻く荒々しい海を想わせる雄大さに魅かれます。





「理想」

奈良県 今西 雅美

中国北魏の造像記を想わせる素朴で力強い線が強く逞しい作品を生み出しています。構成もしっかりとしています。見事な作品です。



「向日 (ヒマワリ)」

奈良県 小城 康弘

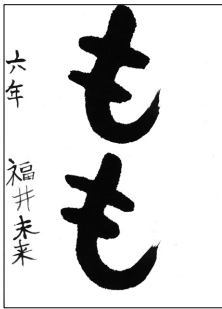
顔真卿の書のように向勢を強調した墨量豊かな線が作品を大きく見せています。筆先が良く紙に食い込んで深い線となりました。



「平」

和歌山県 岡本 靖子

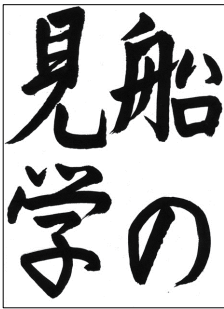
丁寧にゆっくりと運ばれた淡墨の青線は豊かで雅味に満ちています。横画の長さ、線の大小など自然な筆致の内に繊細な心の動きを感じます。



「もも」

鳥取県 福井 未来

柔らかかに甘く実った桃を手にして形をそして中味を想い、ゆったりとした筆使いで表現しています。この丸味に未来さんの喜びを感じます。



「小学校の1番の思い出」

徳島県 土居 憧幸

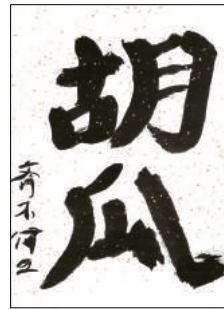
余分な力の抜けた伸びやかな筆致が作品を大きく見せています。意先筆後の極意をよく掴んで気脈の通貫性に見ごたえがあります。



「大志」

徳島県 宮崎 和音

大きく動きしかも筆の特性を上手に活かして見事な作品となりました。「心」の迷いの無い筆致豊かな鋭く澄んだ線が見事です。



「胡瓜」

熊本県 齊木 健二

大きな胡瓜です。大きく筆を動かし何物にも束縛されない自由な運筆が広い宇宙を生み出しました。この動きが魅力です。



「和」

宮崎県 河野 栄司

堂々と力感溢れる筆致で運筆に迷いが無く澄んだ線となり、字形も高く聳える高山を想わせる見事な好作品となりました。



「鷺」

沖縄県 上原 洋子

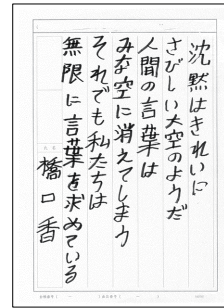
大空を悠然と舞う鷺の姿態を想わせる悠揚迫らない筆致が見事な作品となりました。疎密、筆意など見事に筆中としています。



「祈」

沖縄県 外間 香織

一本一本に対する心からの願い、それがしっかりと表われています。内に籠もるのではなく外に向かう力強い意志が表われた作品と言えます。



「新しい言葉」

福岡市 橋口 香

丁寧にそして懸命に紙面に書く。この書くことが明日の明るい扉を開くとの思いが満ちた作品です。フェルトペンの特性がよく出ています。



「羊蹄の残雪」

北海道 山本 英男

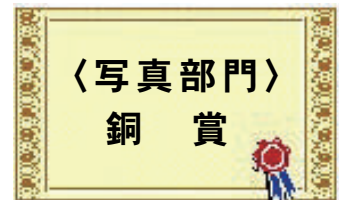
春先、近くの山々は雪が消え、湖も静かで心が温まる時ですね。そして残雪に白く輝く羊蹄が、どっしりと王者の風格で頼もしく思います。



「一輪の花」

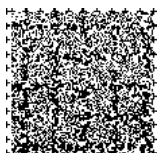
秋田県 能登屋 美佳子

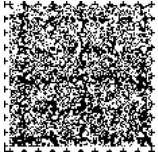
画面左上の木の陰で絵を引き締めて、静かな水面を浮き立たせて、花の可愛さを強調していますね。線づくりが立派です。



〈写真部門〉

銅賞





「めぶき」
福島県 山本 司
ごっこつした古い木の幹から、春の葉芽がささやかに顔をのぞかせている可愛さがよく出ています。



「泳げ鯉のぼり相模川」
神奈川県 志村 勇一
幼い頃から、高い竿の先で風に泳ぐ鯉を見慣れた私にとって、この景色は異文化です。でもそれなりに壮大な景色ではあります。



「勇舞」
長野県 岡村 和人
300ミリレンズで、根気よく追っかけて仕留めた「勇舞」、花の美しさと合わさって素敵な画になっています。おめでとう。



「逃げられちゃった」
岐阜県 山田 悦子
必死に鮎を追い、逃がした鶉の気持ちをひよいと受け止めた貴女のやさしさが伝わります。



「茶摘み」
愛知県 深谷 亘
若い娘さんが揃いの姿で茶摘みをする様子は楽しいものですね。その気持ちが過不足なくよく出ています。



「お~!!」
愛知県 新澤 直美
花の中でひょっこり出会った奇怪な像。思わずパチリは正解でした。楽しい写真になっています。



「せいこう」
京都府 三崎 美夫
六時間の苦闘、ご苦労様でした。よく捉えられましたね。もう何十分の一秒かあとだと掴んだ魚が見えたのかなど、無いものねだりを考えました。失礼。



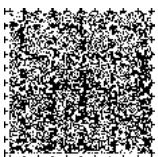
「お盆過ぎの屋下がり」
和歌山県 石橋 由一
画面いっぱい、百日紅の紅がとらえられて、力強い絵になっています。

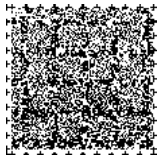


「逆さ不老橋」
和歌山県 鈴木 和馬
そのものズバリ、石の橋の力強さが伝わってきます。



「どんよりした午後」
島根県 田中 哲矢
題名の意味はちょっと判りかねますが、おそらく屋下りのけだるい時間にゆったりとした友人のポートレートを写されたのでしょうか。その感じはよく出ています。





「巢立ち」

広島県 菊光 正和

巣立ったばかりの幼いツバメの兄弟の交流がうまく捉えられていて、ほほえましい写真です。



「華美」

広島県 川口 幸二

祭りの締めくくりに二尺玉を、ずばり捉えて力強いかぎりです。まさに「日本の花火」ですね。



「おっ、こんなところに」

徳島県 河野 和真

「おっ、こんなところに」と作者が感じるほど小さくやかに咲いた花なんです。その感じがよく出ています。



「古代ハス」

徳島県 梶野 紗希

現代によみがえった古代の蓮の花を、真正面からピシッと捉えた美しい写真です。感動しました。



「四季の里に咲く」
地利が悪く、バックの処理に苦労しながら花を美しく写すためにボジションに工夫され、美しい絵に仕上がっています。
仙台市 三浦 正利



「東北絆まつり（すずめおどり）」

仙台市 伊藤 光夫

みんないい顔をしています。こんな一瞬を捉えるのは大変だったでしょう。楽しい写真になりましたね。



「何!!」

堺市 東本 秀夫

メジロを求めて苦労をして、でもひよいとルリビタキに会って、一瞬を逃さず撮影した苦労が実りましたね。サイズといい表情といい満点です。



「野生の証し」

広島市 花ノ木 清孝

木の実を食べにくる雀の習性を熟知されていたからこそ、写せた一枚です。その知恵と努力に感心しました。

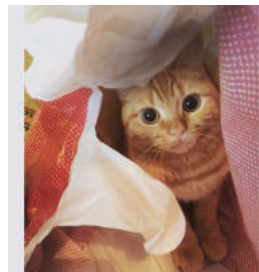
〈携帯フォトの部〉
入賞



「きれいな花」
つつじの花を、キッチン、過不足なく写されています。美しいですね。
秋田県 伊藤 譲



「起こさないで...」
牛舎の隅の藁の上でうたた寝するかわい仔猫。ゆたかな屋下がりですね。
栃木県 匿名希望



「はこいりむすめ」
ちやんと必要な距離から、必要なサイズで猫ちゃんを写しています。可愛い!!



「夏の花火」

鹿児島県 坂元 彩花
花火を見事に捉えています。素敵!

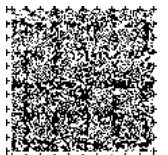
戸山サンライズ (通巻第276号)

発行 平成29年12月25日

発行人 公益財団法人 日本障害者リハビリテーション協会 会長 炭谷 茂

編集 全国障害者総合福祉センター

〒162-0052 東京都新宿区戸山1-22-1 TEL.03(3204)3611(代表) FAX.03(3232)3621
<http://www.normanet.ne.jp/~ww100006/>



ソウェルクラブ
Sowel
CLUB

会員数

25.8万人

(平成29年3月現在)

新規会員募集中

ソウェルクラブには、
職員が求めている
福利厚生があります。

ソウェルクラブの資料請求、
お問い合わせは、下記まで!

福利厚生センター(ソウェルクラブ)は…

社会福祉事業・介護保険事業に従事する方の福利厚生を全国一括で展開し、スケールメリットを活かすことにより、個々の法人では実現が難しい充実したサービスを提供しています。

1

加入のメリット

- ・職員のリフレッシュやストレス解消
 - ・職員の就労意欲の向上
 - ・職員のチームワークの構築 など
- 職場環境が改善することにより、さまざまな効果を実感していただけます。

2

充実したサービス

健診費用の助成、健康生活用品給付、各種お祝品、弔慰金をはじめとした基本サービスに加え、地域密着サービス、クラブオフなど幅広いサービスを展開しています。

3

掛金はわずか年1万円/人

会員1人当たり年1万円のご負担のみで、ソウェルクラブが提供する全てのサービスが利用できます。
また、掛金が年5千円の非常勤職員向けコース(サービスは一部限定)もございます。

ソウェルクラブ
Sowel
CLUB

社会福祉法人 福利厚生センター

<http://www.sowel.or.jp> 詳しくは で または、お電話でお問い合わせください。

TEL ☎ 0120-292-711 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-3-1 NBF小川町ビル10階